

平成21年度病虫害発生予察特殊報第2号

平成21年 8月31日

発表：福島県病虫害防除所

病虫害名 ヒメボクトウ【*Cossus insularis* (Staudinger)】

寄主植物名（作物名） リンゴ、日本ナシ

1 発生状況

平成21年6月に福島市のリンゴ園やいわき市のナシ園で枝幹部から虫糞や木屑が発生している被害樹が確認された。

形態や被害状況からボクトウガ類の一種と思われたため、横浜植物防疫所に同定を依頼した。その結果、チョウ目ボクトウガ科のヒメボクトウ *Cossus insularis* (Staudinger) であることが判明した。

ヒメボクトウがリンゴの樹冠上部や日本ナシを加害する例は、いくつかの県から報告されているが、本県では初確認である。これまで、同様にリンゴや日本ナシを加害する枝幹害虫としては、ボクトウガのみが確認されていた。

2 形態

幼虫は背側が赤紫色～赤褐色のイモ虫状であり、体長は約10～40mmである（写真1）。

成虫は開張すると40～60mmになり、ほぼ全身が鱗粉で被われている。触角は糸状であり、前翅は全体に灰褐色で黒色の波状模様が見られる（写真2）。

3 生態

卵は、卵塊で粗皮部に生み付けられる。

幼虫は枝幹内部に侵入して食害し、集団で越冬する。羽化するまでに通常2年かかるが1年の個体もあると考えられている。

平成21年6月よりフェロモントラップを設置し、誘殺消長を調査した結果、6月下旬から誘殺され、7月中～下旬の誘殺数が多くなり、年1回の発生と考えられた（図1、2）。

主な寄主植物は、ポプラやヤナギとされている。

4 被害の特徴

枝や主幹部内に穿孔した幼虫が集団で摂食し加害するため、多くの虫糞と木屑を排出する。1カ所の被害部位に20～30頭（多い場合には100頭以上）寄生することがある（写真3、4）。

ナシでは、直径2cm程度の側枝から直径10cm以上の主枝まで被害が見られる。被害部からは木屑が排出されるとともに、樹液が滲出して異臭を発する。

主幹部から側枝まで加害し、中心部の木質部を縦横にせん孔食害する。

せん孔食害されたリンゴ樹やナシ樹は、衰弱するため収量低下につながる。

寄生が多いと枯死することもある。

地面に落ちた木屑を目印にすると被害部位を発見しやすい。

5 防除対策

- (1) 枝幹の被害部位は、せん除して適切に処分する。
- (2) 粗皮の間隙が産卵部位となっているので、休眠期に粗皮削りを実施する。
- (3) リンゴ・ナシでは、スタイナーネマ・カーポカプサエ剤（バイオセーフ）を幼虫発生期に使用する〔2,500万頭（約10g）/25ℓ、木屑排出孔を中心に薬液が滴るまで散布または樹幹注入〕。



写真1 ヒメボクトウ幼虫
(中齢、リンゴ)



写真2 ヒメボクトウ成虫 (飼育)



写真3 ヒメボクトウによるリンゴの被害
(写真提供：農業総合センター果樹研究所)



写真4 ヒメボクトウによるナシの被害
(写真提供：農業総合センター果樹研究所)

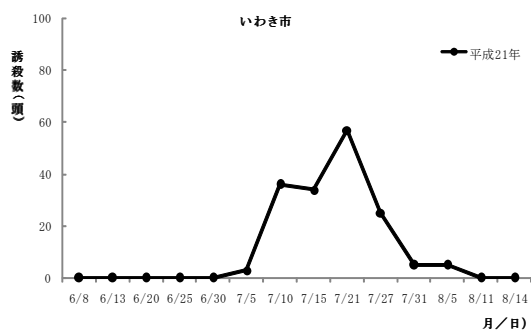


図1 ナシ園でのヒメボクトウ誘殺状況
(いわき農林事務所調査)

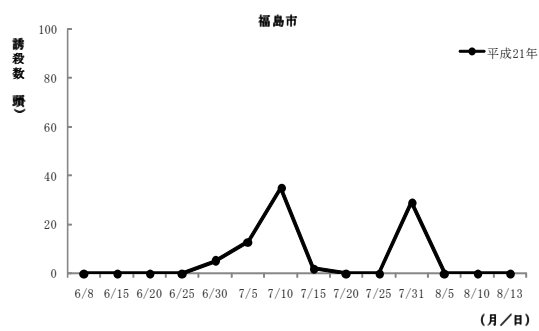


図2 リンゴでのヒメボクトウ誘殺状況
(リンゴ園主調査)